

夢窓幼稚園通信第28号

2017年 6月 30日

“おひさまは みどりの におい”

朝目が覚めて間もなく、こんな言葉が身体の奥の方から立ち昇ってきました。はて、さてどこかで聞いたことがあるような……、お話のタイトル？、詩集の題名だったかな？

しかし、よく考えてみて理屈を言うなら、「おひさまがみどりの匂いをするのではなく、おひさまの光が注がれたみどりがおひさまの匂いをするんでしょ！ 言い方が逆さまだよ」ということにはなりますが、みなさん、どうでしょうか？

みどりの大自然が生きいきとゆたかであるのには、確かにおひさまの光や恵みの雨……の力や働きが必要でしょう。光を与えられるみどりが、ひなたぼっこをした布団やマクラと同じように、おひさまの匂いでいっぱいになるのはもちろんその通りです。

それでも「みどりはおひさまの におい」ではなく、「おひさまは みどりの におい」の方が、何だかどうしても魅力的な気がするのです。

おひさまは みどりにも、石ころにも、ちようちようにも、マクラにも私たちにも普くあたたかな光を投げかけてくれています。少しも与えてあげていないなどころがないのです。光を注ぎつつ「そのものと共に生きる」、「そのものとして生きている」ように感じるのです。

おひさまは自らのために輝くというより、自ら輝くことで他者を明るく照らし出し、光を注いでいるのでしょ。

“帰依”という言葉の本当の意味は分かりませんが、もしかしたら……「おひさまは 光を 投げかける存在たちに帰依している」と言えるのかも知れません。

「おひさまは みどりの におい」は、そんな思いとして、私の胸中にやってきてくれたのだと思います。

おひさまの投げかけは、私に見るといふ行為を超えた、見えないおひさまの姿をも想わせてくれているのでしょ。

輝き光を注ぐ表の姿と同時に、みどり葉や草花や私たちの中に生きるおひさまの姿をもです。

「ほく おひさまになりたかったなあ」と言った子がいます。私もおひさまみたいに生きられたらいいな！と思いますが、とてもとても難しそうです。

七夕の飾りが、なつのおまつりがやってきます。

私たちの感覚を超えた大宇宙のドラマ——星々が地上のひとつひとつに光を注いで存在を励ましてくれていること——を、それらのせしモノ一々のときに先ずは少しでも感じ合うことができればと願っています。

園長 升光 泰雄